果汁および果実飲料を巡る動向

土 谷 三之助

(社)日本果汁協会 専務理事

The Situation of Fruit Juice

San'nosuke Tsuchiya

Japan Fruit Juice Association

Keywords : fruit juice, demand supply**キーワード** : フルーツジュース, 需要供給

本稿では、オレンジとリンゴ果汁の二大果汁について、世界および我が国における生産・流通の動向、並びに我が国における果実飲料を取巻く状況等について概説する。

(注) 多くの果樹において、隔年結果 (豊作年と不作年が交互にくること) があるため、生産量の激増減を平準化するために 2 年平均値とした。以下同じ。

1. オレンジ生果および果汁の動向

1-1. 世界におけるオレンジ生果の生産量

オレンジ果汁の原料であるオレンジ生果の 2000~01 年^(注)の年平均生産量について、FAO 統計によれば約 6200 万トンで、5 年後の 2005~06 年には 5% 増の約 6500 万トンであった。

このような中で、主要生産 5 カ国の生産状況をみると、ブラジルのシェアが依然として 3 割前後と首位を占めているものの、2 位の米国が同 2 割弱から 1 割強へと大きく減少する一方、他の 3 カ国は微増の傾向となっている。

1-2. 世界におけるオレンジ果汁の輸出入量

(1) 輸出量

世界全体におけるオレンジ果汁の 2000~01 年の年平均輸出量 (濃縮度を問わず) について、FAO 統計によれば約 390 万トンで、5 年後の 2005~06 年には 30% 増の約 500 万トンに達している。

このような中で、主要輸出 5 カ国の輸出状況をみると、ブラジルのシェアがこの間に 34% から 38% へと高まる一方、世界第 2 位の生果生産量を誇る米国の輸出量シェアが同期間に 9% から 8% へと減少している。また、生果生産

表 1-1 主要国におけるオレンジ生果の生産量の推移

(単位: 万トン, %)

	2 か年平均							
	2000~01 年		2002~03 年		2004~05 年		2005~06 年	
	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア
世界全体	6197	100	6075	100	6377	100	6504	100
ブラジル	1916	31	1772	29	1808	28	1836	28
米 国	1144	18	1085	18	1004	16	776	12
メキシコ	392	6	393	6	399	6	420	6
インド	263	4	240	4	329	5	367	6
スペイン	276	4	301	5	257	4	300	5

出所: FAO 統計

表 1-2 (1) 主要国におけるオレンジ果汁の輸出量の推移

		2 か年平均				変化率 B/A (%)
		2000～01 年	2002～03 年	2004～05 年	2006～07 年	
		A			B	
世界全体 (千トン)		3 896	3 923	4 584	5 046	130
シ ェ ア (%)	世界全体	100.0	100.0	100.0	100.0	
	ブラジル	33.8	37.2	36.7	38.0	146
	ベルギー	11.8	12.9	14.5	16.1	176
	オランダ	7.4	8.2	9.0	9.7	170
	米 国	9.2	7.2	7.4	7.5	105
	スペイン	4.5	6.3	5.2	4.9	141

出所: FAO 統計

表 1-2 (2) 主要国におけるオレンジ果汁の輸入量の推移

		2 か年平均				変化率 B/A (%)
		2000～01 年	2002～03 年	2004～05 年	2006～07 年	
		A			B	
世界全体 (千トン)		3 410	3 910	4 428	4 441	130
シ ェ ア (%)	世界全体	100.0	100.0	100.0	100.0	
	ベルギー	13.2	12.4	12.6	15.0	147
	フランス	14.3	12.9	12.7	13.0	119
	米 国	10.3	9.2	8.6	10.9	138
	ドイツ	10.3	10.0	10.5	9.7	122
	オランダ	12.5	13.1	13.5	8.4	88

出所: FAO 統計

表 1-2 (3) 主要国におけるオレンジ果汁の差引輸出入量の推移

		2 か年平均 (単位: 千トン)				変化率 B/A (%)
		2000～01 年	2002～03 年	2004～05 年	2006～07 年	
		A			B	
ブラジル		1 377	1 460	1 680	1 919	139
米 国		▲130	▲79	▲44	▲109	▲84
メキシコ		43	30	37	49	114
インド		▲3	▲3	▲2	▲2	▲67
スペイン		112	168	153	165	147
ベリーズ		37	18	38	31	84
コスタリカ		35	23	36	41	117

注: ▲は入超を示す。

出所: FAO 統計

量シェア 5% で 5 位に入っているスペインが果汁の輸出量シェアでも 5% 前後で 5 位を占めている。なお、第 2 位および第 3 位の輸出量シェアを誇るベルギーおよびオランダについては、両国ではオレンジが栽培されていないことから、次の (2) の輸入量の項からも明らかのように、他の国から輸入した果汁を他の国へ再輸出するという、中継地的機能を果している。

(2) 輸入量

世界全体におけるオレンジ果汁の 2000～01 年の年平均輸入量（濃縮度を問わず。）について、FAO 統計によれば

約 340 万トンで、5 年後の 2005～06 年には 30% 増の約 440 万 t に達している。

このような中で、主要輸入 5 カ国の輸入状況を見ると、米国を除き、ベルギー、フランス、ドイツおよびオランダという、ほとんどオレンジが栽培されていない国で占められている。これらの国では、上記の (1) の輸出量の項でも述べたように、輸入された果汁の自国内消費もあるが、その多くを他の国へ再輸出していることがうかがえる。

(3) 差引輸出入量

オレンジ生果の生産量の多い国では、相対的に果汁の生

表 1-3 (1) 我が国におけるオレンジ果汁の主要仕出国の推移

	2 か年平均（単位：kl（シェア%））								変化率 B/A （%）
	2000～01 年		2002～03 年		2004～05 年		2006～07 年		
	A	シェア		シェア		シェア	B	シェア	
ブラジル	66031	76	55825	71	65559	74	59653	77	90
米 国	11918	14	7978	10	5790	7	2388	3	20
そ の 他	9010	10	14877	19	16810	19	14935	19	166
計	86959	100	78680	100	88159	100	76976	100	89

注：濃縮度を問わず。

出所：通関統計

表 1-3 (2) 我が国におけるオレンジ果汁の輸入状況（試算）

	2007 年	2008 年	2009 年
非濃縮果汁 ^{注1}	6 973 kl	5 083 kl	5 409 kl
濃縮果汁 ^{注2}	66 837 kl	57 413 kl	56 525 kl
(5 倍濃縮と仮定した場合の非濃縮果汁換算)	(334 185 kl)	(287 065 kl)	(282 625 kl)
計	73 810 kl A (341 158 kl)	62 496 kl B (292 148 kl)	61 937 kl C (288 034 kl)
仕出国数	25 カ国	24 カ国	24 カ国
ブラジル産のシェア (濃縮度を問わず、ただし、大半が濃縮果汁)	77%	62%	61%

注 1：ブリックス値 20 以下のものの合計

注 2：ブリックス値 20 以上のものの合計

出所：通関統計

産量も多くなることから、生果の主要生産 5 カ国における年平均差引輸出入量（輸出货量から輸入量を差引いたもの、濃縮度を問わず、以下同じ。）をみると、生果生産量が世界第 2 位の米国および同 4 位のインドでは入超となっている。すなわち、米国およびインドでは、国内需要を満たすために輸出货量を超える量を輸入しなければならない状況にあるといえる。

なお、生果の生産量が世界第 1 位のブラジルの差引輸出入量をみると、2000～01 年の年平均の約 140 万トンから 2006～07 年には 39% 増の約 190 万トンと突出しており、第 2 位にスペインが急伸してきている。

1-3. 我が国におけるオレンジ果汁を巡る動向

(1) 主要仕出国

我が国にオレンジ果汁を輸出している国（以下「仕出国」という。）を見ると、ブラジルからが輸入量全体の 8 割弱（濃縮度を問わず。）を占め、米国、イタリア等 20 カ国余りで残りの 2 割強を占めている。

このブラジルからの輸入量シェアが高位に張り付いている反面、米国の我が国への仕出国としての地位が年々低下してきている。

(2) 国産果汁のシェア

国内に供給の輸入オレンジ汁＋国産ミカン果汁の国産

シェアを試算してみると、次のとおりである。

2007 年については、非濃縮果汁（財務省「通関統計」においてブリックス値 20 以下のものの合計）の輸入量 6 973 kl に、濃縮果汁の輸入量（66 837 kl）を 5 倍濃縮品と仮定して非濃縮換算した輸入量の 334 185 kl を加えると、非濃縮果汁相当量としては約 34 万 1 kl 千と試算される。同様に、2008 年は 29 万 2 千 kl、2009 年は 28 万 8 千 kl と試算され、その値は当時の我が国の経済状況をも反映してか、減少傾向となっている（表 1-3 (2)）。

一方、国内におけるミカン果汁の搾汁量について、日本園芸農業協同組合連合会のデータによれば、2007 年産生果によるものが非濃縮相当量で 5 万トン、2008 年産が同 3 万 5 千トン、2009 年産 5 万 1 千トンとなっている（表 1-3 (3)）。

上記のオレンジ果汁の輸入量とミカン果汁の国内搾汁量に基づき、国産シェアを試算してみると、2007 年/年産が 13%、2008 年/年産が 11%、2009 年/年産が 15% となる（表 1-3 (4)）。

2. リンゴ生果および果汁の動向

2-1. 世界におけるリンゴ生果の生産量

リンゴ果汁の原料であるリンゴ生果の 2000～01 年の年平均生産量について、FAO 統計によれば約 5 800 万トン

表 1-3 (3) 我が国におけるミカン果汁の搾汁状況

	2007 年産	2008 年産	2009 年産
非濃縮果汁換算	A' 49 830 t	B' 34 830 t	C' 51 250 t

出所：日本園芸農業協同組合連合会資料に基づく。

表 1-3 (4) 我が国におけるオレンジ+ミカン果汁の国産シェア（試算）

	2007 年/年産	2008 年/年産	2009 年/年産
	A' / A + A'	B' / B + B'	C' / C + C'
自給率（非濃縮換算）	13%	11%	15%

注：比重を 1 と仮定した場合

で、5 年後の 2005～06 年には 12% 増の約 6 500 万トンと、オレンジ生果の生産量と同程度の生産量となっている。

このような中で、主要生産 5 カ国の生産状況をみると、中国のシェアが 35% から 40% 超へと続伸し、引き続き首位を占めているものの、中国以外の国ではイランを除き、低迷傾向の生産量となっている。

2-2. 世界におけるリンゴ果汁の輸出入量

(1) 輸出力

世界全体におけるリンゴ果汁の 2000～01 年の年平均輸出力（濃縮度を問わず。）について、FAO 統計によれば約

140 万トンで、6 年後の 2006～07 年には 63% 増の約 240 万トンに達している。

このような中で、主要輸出 5 カ国の輸出状況をみると、中国のシェアがこの間に 13% から 36% へと高まる一方、世界第 2 位の生果生産量を誇る米国が輸出力シェアでは第 5 位にも入っていない一方、生果の生産量では 5 位以内に入っていないドイツ、ポーランド、オーストリアおよびイタリアが、果汁の輸出力シェアでは 5 位以内に入っている。

(2) 輸入量

世界全体におけるリンゴ果汁の 2000～01 年の年平均輸

表 2-1 主要国におけるリンゴ生果生産量の推移

（単位：万トン，%）

	2 か年平均							
	2000～01 年		2002～03 年		2004～05 年		2005～06 年	
	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア	生産量	シェア
世界全体	5 832	100	5 714	100	6 261	100	6 514	100
中 国	2 023	35	2 018	35	2 385	38	2 697	41
米 国	448	8	391	7	457	7	440	7
イラン	225	4	237	4	242	4	268	4
トルコ	243	4	240	4	234	4	223	3
フランス	228	4	228	4	222	4	211	3

出所：FAO 統計

表 2-2 (1) 主要国におけるリンゴ果汁の輸出力の推移

	2 か年平均				変化率 B/A (%)
	2000～01 年	2002～03 年	2004～05 年	2006～07 年	
	A			B	
世界全体 (千トン)	1 444	1 649	2 157	2 357	163
世界全体	100.0	100.0	100.0	100.0	
シ 中 国	12.9	21.7	24.4	36.4	301
エ ドイツ	13.3	14.3	16.0	13.4	164
(% ポーランド	11.9	13.3	10.9	8.8	120
オーストリア	6.6	5.8	6.6	4.5	113
イタリア	7.6	4.6	3.5	3.0	64

出所：FAO 統計

表 2-2 (2) 主要国におけるリンゴ果汁の輸入量の推移

	2 か年平均				変化率 B/A (%)
	2000～01 年	2002～03 年	2004～05 年	2006～07 年	
	A			B	
世界全体 (千トン)	1 433	1 662	2 049	2 210	154
世界全体	100.0	100.0	100.0	100.0	
シ 米 国	20.0	21.2	20.4	19.7	152
エ ドイツ	26.2	27.9	23.2	18.6	109
ア オーストリア	8.7	8.5	8.9	6.7	120
(%) オランダ	5.9	5.5	5.8	6.4	169
日 本	6.2	4.7	5.1	5.2	129

出所：FAO 統計

表 2-2 (3) 主要国におけるリンゴ果汁の差引輸出入量の推移

	2 か年平均 (単位：千トン)				変化率 B/A (%)
	2000～01 年	2002～03 年	2004～05 年	2006～07 年	
	A			B	
中 国	181	354	564	853	471
米 国	▲252	▲326	▲389	▲401	▲159
イ ラン	27	21	19	20	74
トルコ	41	37	45	40	98
フランス	▲32	▲34	▲51	▲69	▲216
ポーランド	163	217	205	175	107
チ リ	50	46	57	66	132
アルゼンチン	55	53	53	59	107
イタリア	59	47	79	53	90
スイス	41	26	84	53	129

注：▲は入超を示す。

出所：FAO 統計

入量（濃縮度を問わず。）について、FAO 統計によれば約 140 万トンで、6 年後の 2006～07 年には 54% 増の約 220 万トンに達している。

このような中で、主要輸入 5 カ国の輸入状況をみると、米国、ドイツ、オーストリア、オランダおよび日本の 5 カ国とも、その輸入量を増やしてきている。ちなみに、日本の輸入量は、2000～01 年と 2006～07 年の年平均で約 3 割増えている。

(3) 差引輸出入量

リンゴ生果の主要生産 5 カ国における年平均差引輸出入量をみると、生果生産量が世界第 2 位の米国および同 5 位のフランスでは入超となっている。すなわち、米国およびフランスでは、オレンジの場合と同様、国内需要を満たすために輸出量を超える量を輸入しなければならない状況にあるといえる。なお、生果の生産量が世界第 1 位の中国の差引輸出入量をみると、2000～01 年の年平均の約 18 万トンから 2006～07 年には約 5 倍増の 85 万トンと突出しており、第 2 位のポーランドを大きく引き離している。なお、差引輸出入量で 2006～07 年の年平均で 5 万トン以上の出

超国としては、ポーランド、チリ、アルゼンチン、イタリアおよびスイスがあげられる。

2-3. 我が国におけるリンゴ果汁を巡る動向

(1) 主要仕出国

我が国へのリンゴ果汁の主要な仕出国をみると、中国からが 2000～01 年の年平均では輸入量全体（濃縮度を問わず。）の 3 割強であったものが、2006～07 年の年平均では 7 割弱を占めるに至った。

この中国からの輸入量シェアが高まるにつれて、オーストリアおよびその他の国からの輸入量が減少が続いている。

(2) 国産果汁のシェア

国内に供給のリンゴ果汁の国産シェアを試算してみると、次のとおりである。

2007 年については、非濃縮果汁の輸入量 2 452 kl に、濃縮果汁の輸入量 (91 074 kl) を 5 倍濃縮品と仮定して非濃縮換算した輸入量の 455 370 kl を加えると、非濃縮果汁相当量としては約 45 万 8 千 kl と試算される。同様に、2008 年は 40 万 kl、2009 年は 30 万 3 千 kl と試算され、その値はオレンジ果汁と同様に、我が国の経済状況を反映してか、

表 2-3 (1) 我が国におけるリンゴ果汁の主要仕出国の推移

	2 か年平均（単位：kl（シェア%））								変化率 B/A （%）
	2000～01 年		2002～03 年		2004～05 年		2006～07 年		
	A	シェア		シェア		シェア	B	シェア	
中 国	23 829	34	28 601	47	44 008	55	60 025	69	251
オーストリア	11 572	17	9 504	16	10 967	14	9 426	11	81
そ の 他	34 000	49	22 537	37	25 070	31	17 797	20	52
計	69 401	100	60 642	100	80 045	100	87 248	100	126

注: 濃縮度を問わず.

出所: 通関統計

表 2-3 (2) 我が国におけるリンゴ果汁の輸入状況 (試算)

	2007 年	2008 年	2009 年
非濃縮果汁 ^{注1}	2 452 kl	1 196 kl	1 065 kl
濃縮果汁 ^{注2} (5 倍濃縮と仮定した場合の非濃縮換算)	91 074 kl (455 370 kl)	79 756 kl (398 780 kl)	60 297 kl (301 485 kl)
計	93 527 kl A (457 822 kl)	80 951 kl B (399 976 kl)	61 362 kl C (302 550 kl)
仕出国数	22 カ国	19 カ国	19 カ国
中国のシェア (濃縮度を問わず, ただし, 大半が濃縮果汁)	71%	70%	70%

注 1 ブリックス値 20 以下のものの合計

注 2 ブリックス値 20 以上のものの合計

出所: 通関統計

表 2-3 (3) 我が国におけるリンゴ果汁の搾汁状況

	2007 年産 ^{注1}	2008 年産 ^{注1}	2009 年産 ^{注1}
非濃縮果汁換算	A' 80 262 t	B' 93 340 t	C' 59 966 t

出所: 日本果汁協会りんご搾汁部会所属の 19 社からの申告に基づく.

表 2-3 (4) 我が国におけるリンゴ果汁の国産シェア (試算)

	2007 年/年産	2008 年/年産	2009 年/年産
	A'/A+A'	B'/B+B'	C'/C+C'
国産シェア (非濃縮換算)	15%	19%	17%

注: 比重を 1 と仮定した場合

減少傾向となっている.

上記のりんご果汁の輸入量と国内搾汁量に基づき, 国産シェアを試算してみると, 2007 年/年産が 15%, 2008 年/年産が 19%, 2009 年/年産が 17% となる (表 2-3 (4)).

3. 果実飲料の出荷量および摂取量の動向

3-1. 出荷量

清涼飲料の出荷量について, 2000～01 年平均と 2008～09 年平均とを比較すると, 全体では 16% 増となっている. これをカテゴリー別にみると, ミネラルウォーターの伸

びが著しく, 次に茶系飲料, 炭酸飲料, コーヒー飲料の順となっており, 唯一, 果実飲料が 3 割減 (果実ジュースでは 1 割減) となっている.

果実飲料の出荷量の減少が著しい背景には, 景気が停滞し, 消費者の可処分所得に余力がなくなっている中で, カテゴリー間の販売力競争において他の清涼飲料に比べて果実飲料は中身の原料コストが高い (自ずと小売価格も高い) という重荷を背負っているからといえる.

なお, 総理府統計局の「家計調査」によれば, 果実・野菜ジュースの 1 世帯当たりの年間支出額をみると, 近年で

表 3-1 我が国における清涼飲料の出荷量の推移

カテゴリー	2 か年平均（千 kl）					変化率 B/A （%）
	2000～01 年 A	2002～03 年	2004～05 年	2006～07 年	2008～09 年 B	
茶系飲料	4 604	4 876	5 548	5 573	5 367	117
炭酸飲料	2 727	2 595	2 744	2 759	3 139	115
コーヒー飲料	2 649	2 750	2 807	2 920	2 905	110
ミネラルウォーター	958	1 104	1 362	1 863	2 052	214
果実飲料	2 180	1 826	1 797	1 761	1 515	69
（うち、果実ジュース）	(566)	(528)	(550)	(569)	(507)	(90)
その他	2 558	3 014	3 270	3 354	3 156	123
合計	15 676	16 165	17 528	18 230	18 134	116

出所：（社）全国清涼飲料工業会

表 3-2 年齢階層別果実類摂取量の推移

（単位：1 人 1 日当たり平均 g，%）

	総 数	1～19 歳	20～49 歳	50～69 歳	70 歳以上
2003 年	115.1	101.3～24.1	63.2～88.0	128.2～153.8	151.5
2005 年	125.7	113.3～19.4	70.6～86.1	137.3～170.8	169.6
2007 年	111.6	85.1～109.0	66.3～77.0	125.7～161.9	148.7
2008 年	116.8	80.3～99.0	70.4～75.9	122.8～157.0	160.5
2008/03 年	▲7.1	▲17.1～▲29.1	▲0.2～▲13.5	▲8.1～▲10.6	▲5.4

出所：「国民健康・栄養調査結果」

は 2004 年の 9 460 円をピークに減額傾向にあり，2009 年には 8 341 円となった。

3-2. 年齢階層別果実類の摂取量

我が国における果実類（果実飲料等の果実加工品を含む。）の年齢階層別消費状況を「国民健康・栄養調査結果」の摂取量からみると，摂取量の多い階層は，従来から，20 歳未満層と 50 歳以上の層であるが，最近の状況をみると，特に 20 歳未満の層における摂取量が激減している。

この激減の背景には，景気の後退に伴い，20 歳未満の層を扶養する両親の可処分所得の減少が大きく影響しているものと見られる。

果実飲料を含む果実類の消費量増大は，我が国経済の浮上を待たなければならないかもしれない。

4. 果実飲料業界の抱える 3 つの大きな課題

○他の清涼飲料に比べて中身の原料コストが高いこと。

果実飲料の中身の原料コストは，果汁 100% の「果実ジュース」の最終製品において，4～5 割を占めている一方，ミネラルウォーターや茶系飲料は 1 割に満たないといわれている。このため，“利の薄い”果実飲料からの撤退あるいは撤退を検討している事業者が増えてきている。

この課題に 대응していくためには，製造コストの更なる削減を図っていくことはもちろんであるが，消費者に，果実

飲料，特に果実ジュースの健康機能性を根気強く訴えていくしかないものと思われる。

○消費減の傾向に如何にして歯止めを掛けられ得るか。

表 3-1 に示されているように，果汁が 100% の「果実ジュース」の落込みはそれほどでもないが，果汁が 100% 未満の「果汁入り飲料」（果汁が 10～20% のものが大半を占める。）の落込みが著しいことを考慮すれば，消費者に，果汁分の多い果汁入り飲料商品を提供するとともに，上記①の健康機能性を根気強く訴えていくことにより，その減少傾向に歯止めが掛けられるのではと思われる。

○原料原産地表示問題にいかに対応すべきか。

現在，政府（消費者委員会や消費者庁，農林水産省等）において，果実飲料に対する「原料原産地表示の義務化」が検討されているが，果実飲料事業者の多くは，もしも義務化されれば，“供給量が毎年不安定な国産果汁の使用を控える”と考えていることに留意する必要がある。

果汁協会では，この原料原産地表示の問題に関しては“強調表示”を推奨してきており，国内果樹産業を守るためにも，“義務化”よりも“強調表示”を強く推進し，かつ，消費者に啓発・普及していくことが最善策と考えている。

（平成 23 年 4 月 8 日受理）